

病害虫発生予察予報第1号（5月の予報）

佐賀県

目次

1. 5月の病害虫	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 5月の予報	
普通作物（水稻）	3
果樹（カンキツ、ナシ、ブドウ、果樹全般）	6
茶	10
野菜（イチゴ、ナス、キュウリ、トマト、アスパラガス、タマネギ）	12
5. 病害虫診断状況	21
6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫	22
7. 農薬の適正使用について	23

今月のトピックス

タマネギべと病の発生が圃場によって多く発生しています。注意報第1号（平成27年4月2日発表）を参考に、防除を徹底してください。

1. 5月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



水稻の葉いもち（矢印が病斑）



ナシ黒星病



イチゴのうどんこ病



チャのカンザワハダニ

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成27年4月24日 福岡管区気象台発表】

5月の天気は数日の周期で変わるでしょう。

5月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	40	40
降水量	30	30	40

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の5月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温やや高」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
5月の平均気温	19.5℃	-0.3℃ ~ +0.3℃
5月の降水量	198.2mm	79% ~ 118%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査圃場の写真を抜粋して掲載しています。

4. 5月の予報

普通作物

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
水稲	いもち病	多	多	133～142 145～151	平成27年4月28日付病虫害対策資料第2号参照
	ばか苗病	並	並	133～142	
	イネミスゾウムシ	やや多	やや多	178～179 193～194	
	スクミリンゴガイ	やや多	やや多	184～189	

【特記事項】

- いもち病の多発生が予想されることから、種籾の比重選と通常の種子消毒剤にベノミル剤を加えた種子消毒を徹底する。
- 育苗箱処理剤は施薬量が少ないと防除効果が低下するので、適正な量を処理する。

水稲 (巡回調査日：4月23日)

1. いもち病 (苗いもち)

- 予報の内容
発生量：平年より多い (前年より多い)
- 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

平成26年の穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稲 (8月上旬) で1.7% (平年3.7%)、北部山間の早植え水稲 (9月上旬) で20.8% (平年6.9%)、普通期水稲 (10月上旬) で38.8% (平年5.9%) であり、早期は平年並、早植え、普通期は平年より多かった。〈+〉

(2) 水稲籾のいもち病菌保菌率

県内各地の巡回調査地点から採取した平成26年産籾のいもち病菌保菌率は、早期水稲で2.2% (平年1.4%)、早植え水稲で10.4% (平年1.0%)、普通期水稲のうち品種で3.6% (平年0.4%)、普通期水稲のもち品種で0% (平年0.3%) であり、早植え、普通期うるち品種において平年より高かった (表1)。〈+〉



巡回調査時の生育状況 (早期水稲)

表 1 平成26年産水稲粃のいもち病菌保菌率

作 型	品 種	調査圃場数	保菌粃率	平年 (保菌粃率)
早期水稲	コシヒカリ	12 圃場	2.2 %	1.4 %
早植え水稲	うるち品種	16	10.4	1.0
普通期水稲	うるち品種	31	3.6	0.4
	もち品種	10	0	0.3

注) 調査は巡回調査圃場で行い、各圃場当たり早期水稲、早植え水稲では50粒の粃を、普通期水稲では25粒の粃について保菌状況を調べた。
保菌粃率の平年は平成16～25年産の平均値。

(3) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 比重選と通常の種子消毒剤にベノミル水和剤を加えた種子消毒を徹底する。
- (2) 育苗箱で種粃が露出すると本病が発生しやすいため、覆土を適正に行う。
- (3) 詳細な防除対策については、[平成27年4月28日付病害虫対策資料第2号](#)を参照する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 前年の発生は平年より多く、越冬密度は平年より多いと考えられる。〈+〉
- (2) 早期水稲（上場地域）の巡回調査では、食害株率が1.6%（平年0.4%、前年0%）であり、平年及び前年よりやや多い。〈±～+〉
- (3) 気象予報から、越冬後成虫の本田飛び込みの時期は平年よりやや早いと予想される。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年発生が多かった地域では本虫に登録のある箱処理剤を施用する。
- (2) 越冬成虫は4月中旬～6月上旬に水田へ侵入する。本田での発生状況の把握に努め、成虫が10株当たり5頭以上みられたら、粒剤を散布する。

3. スクミリンゴガイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 越冬状況

- ① 平成27年4月に調査した用排水路における平均越冬生貝率は、35.1%と平年(49.6%)よりやや低かった（表2）。〈-～±〉
- ② 水田内での越冬生貝率は、平成26年12月～平成27年2月の平均気温が6.55℃と平年(6.57℃)並であったことから、平年並と推定される。（図1：過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。）〈±〉

(2) 気象条件

気象予報では、本貝による被害の発生時期は平年よりやや早いと予想される。〈±～+〉（気温やや高：±～+）。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 用排水路・クレークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。

- (2) 発生圃場では、浅水管理を徹底する。
- (3) 発生が多い圃場では、薬剤防除を行う。

表2 用排水路におけるスクミリンゴガイの越冬生貝率の年次推移
(農業技術防除センター4月調査)

調査地点	越冬生貝率 (%)					H17～26年の平均b)
	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	
武雄市(コンクリート水路)	13.5	31.0	81.7	29.7	67.0	—
鳥栖市(コンクリート水路)	20.0	2.0	11.9	16.3	9.3	
白石町(クリーク)	7.5	49.6	41.0	18.7	19.0	
川副町(コンクリート水路)	— a)	— a)	— a)	—	—	
平均	13.7	27.5	44.9	21.6	35.1	49.6

a) 調査に必要な数を採集できなかった。

b) H17～26年の平均は49.6% (H17-18年は県内5地点、H19-22年は4地点、H23-27年は3地点を調査)。

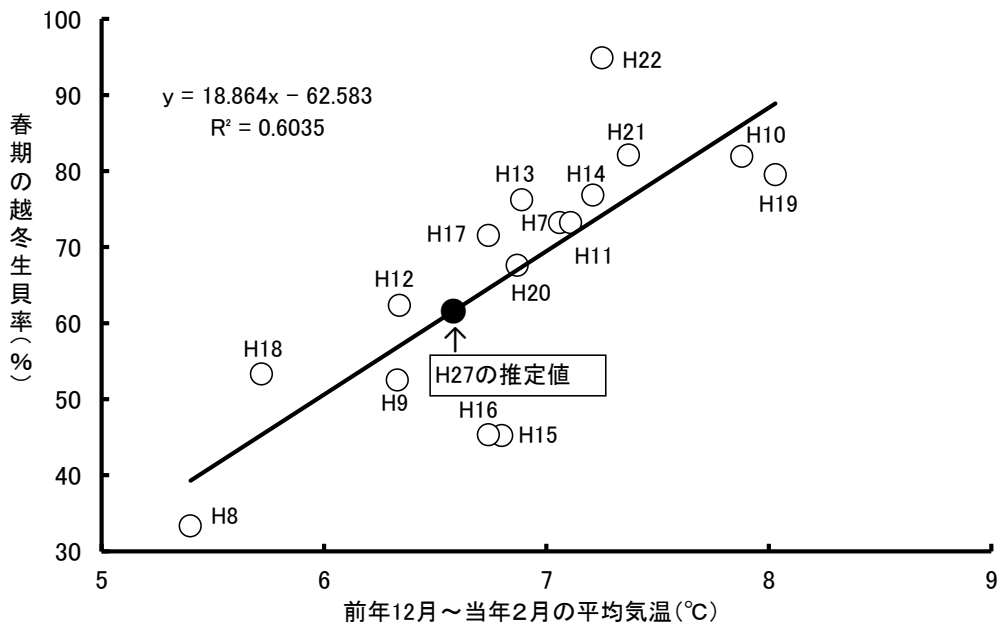


図1 冬期(12～2月)の平均気温と水田内でのスクミリンゴガイの越冬生貝率(4月)との関係
○: H7～H22の実測値(佐賀市の気温、川副町の同一水田における越冬生貝率)
●: H26年12月～H27年2月の気温を用いて上記の関係式から推定したH27年春期の越冬生貝率

果 樹

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備考
		平年比	前年比		
カンキツ	そうか病	並	並	230～232	
	かいよう病	やや少	並	234～237	
	灰色かび病	並	並	237～238	
	ミカンハダニ	並	並	259～263	
ナシ	黒星病	多	やや多	298～303	
ブドウ	黒とう病	並	並	340～342	
	べと病	並	並	344～346	
果樹全般	カメムシ類	並	並	カンキツ：266～269 ナシ：318～319 ブドウ：360～361	平成27年3月5日 付病虫害対策資 料第23号参照

【特記事項】

【カンキツ】

- カンキツかいよう病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤による防除を行う。

【ナシ】

- 黒星病の発病葉・果実は必ず除去し、園外で処分する。また、発病が認められない場合は保護殺菌剤を散布するが、発病が認められる場合や長雨で防除ができなかった場合はDMI剤による防除を行う。

【ブドウ】

- 大豆大の時期から袋かけ前まで、薬剤による果面の汚れや果粉の溶脱が発生しやすいため、小豆大の時期までの薬剤防除を徹底する。

【キウイフルーツ】

- キウイフルーツかいよう病の発生が県内で確認されている。葉の斑点症状や枝枯れ、樹液の漏出等の症状が本病の未確認園で新たに見つかった場合は、すぐに関係機関へ連絡する（[平成27年4月13日付病虫害対策資料第1号](#)参照）。

【果樹全般】

- スピードスプレーヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。また、ナシ・ブドウにおいて手散布する場合は、薬液が十分かかるように棚の上下両方向から行う。
- 気温の上昇に伴い、カメムシ類が、カンキツ（開花期前後）、ウメ、モモ、ナシなどの園に飛来する場合がありますので発生に注意する。

カンキツ

(調査日：4月20日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. そうか病

1) 予報の内容

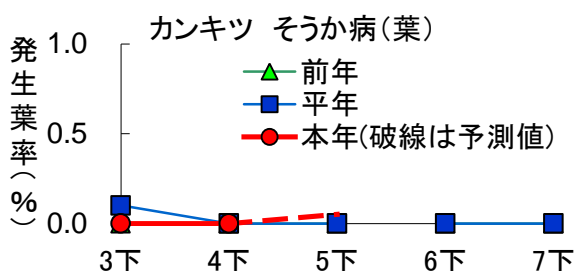
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、温州みかんでの発病を認めていない。（発生葉率：平年0%、前年0%）〈±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)果実への感染を防止するため、落弁期に防除を行う。
- (2)果実に薬害を生じる場合があるため、落弁期以降にデランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

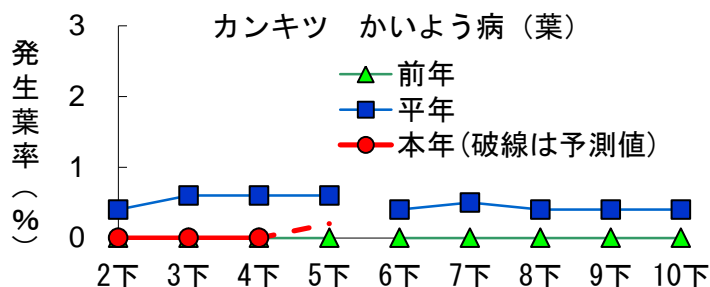
発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、温州みかんでの発病を認めていない。（発生葉率：平年0.6%、前年0%）〈-～±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)本病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤による防除を行う。
- (2)無機銅水和剤（クレフノン200倍加用）またはICボルドー66D（アビオンE1,000倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安はクレフノン200倍加用無機銅水和剤で20～25日で、ICボルドー66Dの場合は30日とする。
- (3)ICボルドー66Dは、展葉期に単剤で散布すると、葉に石灰による薬害が発生するので、散布する際はアビオンE1,000倍を必ず加用する。
- (4)発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定については枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わない。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

ナシ

(調査日：4月20日)



巡回調査時の生育状況

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：**平年より多い**（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生果率は0.2%（平年0.1%、前年0%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

(2) 本病の主要感染期である開花期前後（4月1日～20日）の平均気温は平年よりやや高く（本年14.3℃、平年13.2℃、前年12.8℃）、降雨量は平年より多く（本年247mm、平年121mm、前年74mm）、感染に好適な条件で推移した。（※気象データは伊万里観測所の値）〈+〉

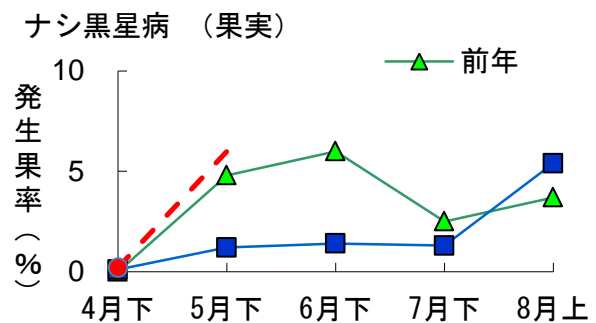
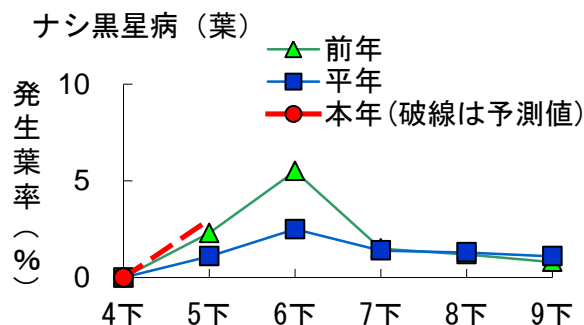
(3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) DMI剤耐性菌の発生を防止するために、5～6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する（薬剤は施肥・病害虫防除・雑草防除のてびきP300～P302を参照）。ただし、発病が認められた場合や長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。

(2) スピードスプレーヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。

(3) 多くの果実が着果していると、薬液が果実に付着しにくくなるため、摘果作業が遅れないよう注意する。



ブドウ

(調査日：4月20日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：**平年並**（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、葉での発病を認めていない（発生葉率：平年0%、前年0%）。〈±〉

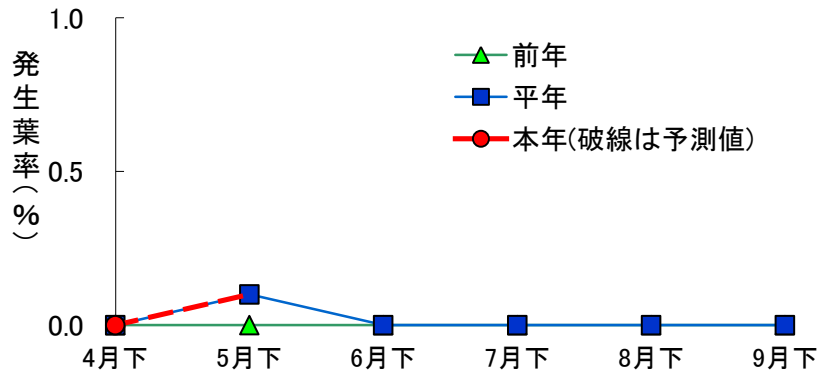
(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

(2) 新梢葉への感染を防ぐため、萌芽期～新梢伸長期に防除を行う。

ブドウ 黒とう病



果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 平成27年1月中～下旬に、県内22地点の常緑広葉樹林の林床から落葉を採集し、チャバネアオカメムシ成虫の越冬状況を調査した結果、平均越冬虫数は0.18頭/m²（平年0.34頭/m²、前年0.29頭/m²）、越冬地点率は31.8%（平年46.5%、前年36.4%）であり、越冬密度は平年及び前年並と推定される（平成27年3月5日付け病害虫対策資料第23号参照）。
- (2) 越冬状況調査の結果から、本年の5月～8月上旬における果樹園への果樹カメムシ類の飛来量は、平年及び前年並と予測される。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類の飛来については、カンキツ（開花期前後）、ウメ、モモ、ナシなどで特に注意する。
- (2) 果樹カメムシ類は樹高の高い樹木に一度飛来して、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないように剪除する。
- (3) 越冬密度は地域によって異なるため、発生動向には注意する。
- (4) 今後のカメムシ類の発生量と果樹園への飛来予測時期については、農業技術防除センターが発表する各種情報及びホームページ（<http://www.pref.saga.lg.jp/web/boujo>）を参考にする。

茶

【概要】

作物名	病害虫名	発生量		病害虫防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	多	多	418～419	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	425～426	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	423～424	

【特記事項】

- 被覆栽培はカンザワハダニの発生を助長する傾向にあるため、一番茶の摘採が遅い園では圃場観察を徹底し、発生茶園では農薬の摘採前使用可能日数に注意して防除を行う。また、一番茶摘採後に本種の発生がみられる園でも防除を徹底する。
- チャノミドリヒメヨコバイおよびチャノキイロアザミウマは、5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。
- クワシロカイガラムシの幼虫ふ化期は5月中～下旬である。園内のふ化状況を観察し、ふ化最盛期に適期防除を行う。
- ナガチャコガネは、二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬～6月中旬頃）に、羽化期～成虫飛来初期を迎え、防除適期となるため、摘採前使用日数に注意して防除を行う。
- 県内において、チャトゲコナジラムシの発生が確認されている。疑わしい虫や葉が見つかった場合には、すぐに関係機関へ連絡する。防除対策は、ホームページ掲載の「[チャトゲコナジラムシの生態と防除対策について](#)」を参照する。

茶

（巡回調査：4月20～22日）

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生葉率は10.6%（平年3.3%、前年0.6%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

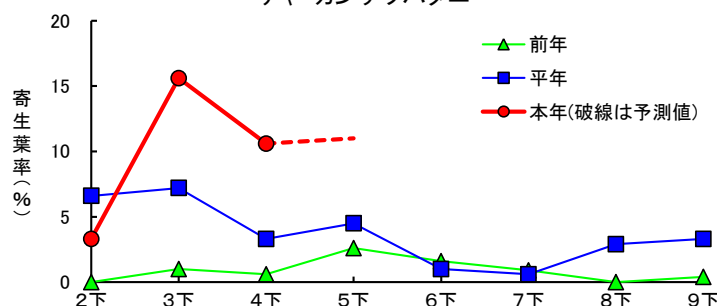
(2)気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1)生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。

チャ カンザワハダニ



巡回調査時の生育状況

2. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

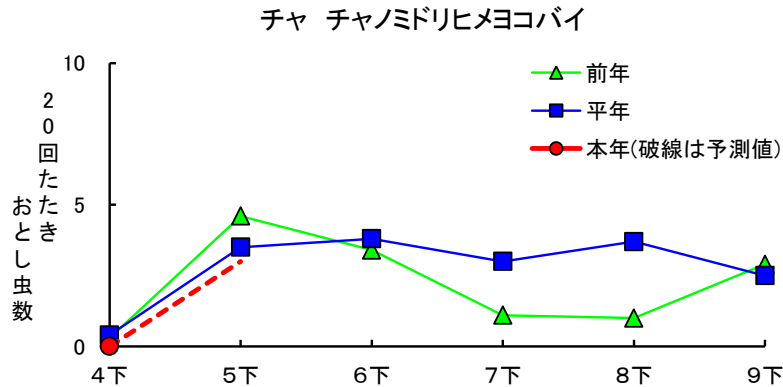
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生を認めていない（平年0.4頭、前年0.3頭）。〈-～±〉
- (2) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 一番茶摘採残葉や遅れ芽に生息し、二番茶生育期の発生源となるため、一番茶摘採後に防除する。
- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。



3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

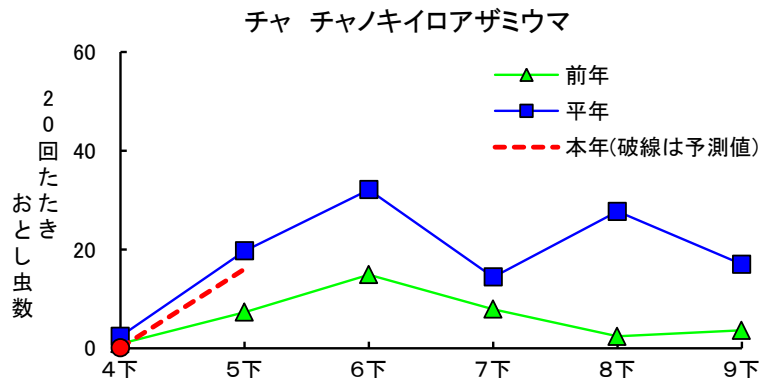
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、20回たたき落とし虫数は0.1頭（平年2.4頭、前年0.9頭）で、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉
- (2) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 一番茶摘採残葉や遅れ芽に生息し、二番茶生育期の発生源となるため、一番茶摘採後に防除する。
- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	やや多	やや多	188～191	
	ハダニ類	多	多	199～200	
	アブラムシ類	並	並	204～205	
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	やや多	やや多	188～191	
	ハダニ類	やや多	多	199～200	
	アブラムシ類	多	多	204～205	
ナス	すすかび病	並	並	234～235	
	灰色かび病	並	並	232～234	
	アザミウマ類	やや多	多	244～245	
	コナジラミ類	並	やや多	243	
	ハモグリバエ類	並	やや多	246	
キュウリ (半促成)	べと病	並	並	166～168	
	うどんこ病	並	やや多	173～175	
	灰色かび病	並	並	168～169	
	褐斑病	並	並	170～172	
	アザミウマ類	やや多	並	148～149、183～184	
	コナジラミ類	並	並	145～147、181～182	
トマト	灰色かび病	やや多	やや多	210～212	
	葉かび病	並	並	216～217	
	コナジラミ類	並	やや少	145～147、219～222	
	ハモグリバエ類	並	並	154～155、223	
アスパラ ガス	褐斑病	並	並	299～300	
	斑点病	並	並	299	
	アザミウマ類	並	並	301～302	
	アブラムシ類	並	やや多	303	
タマネギ (本圃)	べと病	やや多	並	273～275	平成27年4月2日付病害虫発生予察注意報第1号参照
	ホトトリクス葉枯症	並	並	275	
	ネギアザミウマ	やや少	並	283～284	

【特記事項】

【イチゴ】

1. うどんこ病については、子苗への伝染を防ぐため、親株の防除を徹底する。
2. 立枯性病害（炭そ病、疫病、萎黄病）については、ビニル雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用して、水はねによる菌の飛散を防ぐ。炭そ病については、親株からの定期的な薬剤防除を徹底する。

【施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通】

1. 施設野菜類のアザミウマ類やコナジラミ類は、気温の上昇とともに急激に増加するため、低密度時に防除を徹底する。また、圃場においてこれらが媒介するウイルス病の発生がみられる場合は、伝染源となるため早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。栽培終了後はアザミウマ類等が圃場外へ飛び出さないよう、ハウス密閉処理を行う。

【タマネギ】

1. 一部圃場ではタマネギべと病が多発生している。多発生したべと病が周辺圃場の伝染源になる場合があるので、防除対策は地域全体で取り組む。（[平成27年4月2日付病害虫発生予察注意報第1号](#)参照）。
2. 一部圃場ではタマネギボトリチス葉枯症が多発生している。本病は貯蔵中の腐敗の原因となるため、灰色腐敗病を含めて立毛中に防除を徹底する。

イチゴ（本圃）

（巡回調査：4月20日～23日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

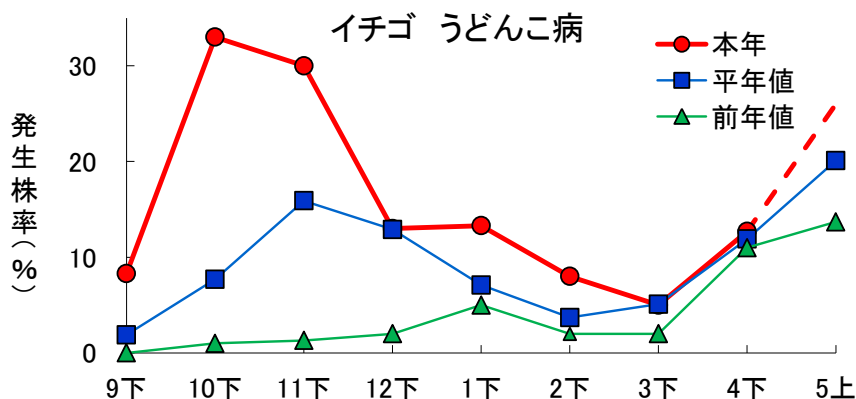
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は12.7%（平年11.9%、前年11.0%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2) 今作では、本病の発生が多く推移したため、圃場内での菌密度は高いと思われる。〈+〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 古葉等を除去し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

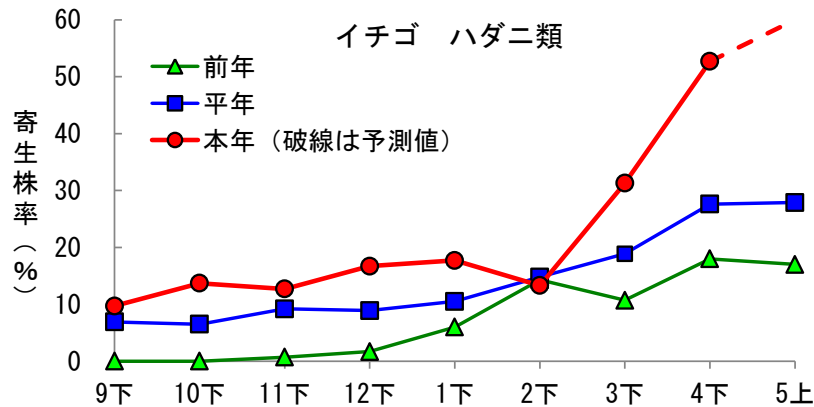
(1) 巡回調査では、寄生株率は52.7%（平年27.6%、前年18.0%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、古葉等を除去し、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：4月20日～23日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

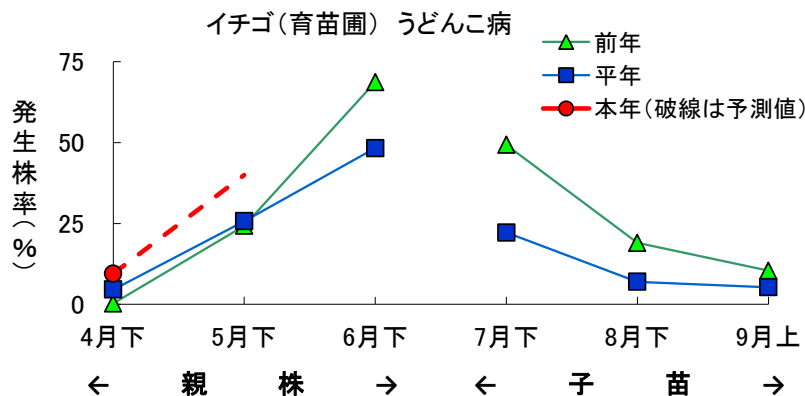
(1) 巡回調査では、発生株率は9.5%（平年4.6%、前年0.3%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±~+〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 古葉等を除去し、葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

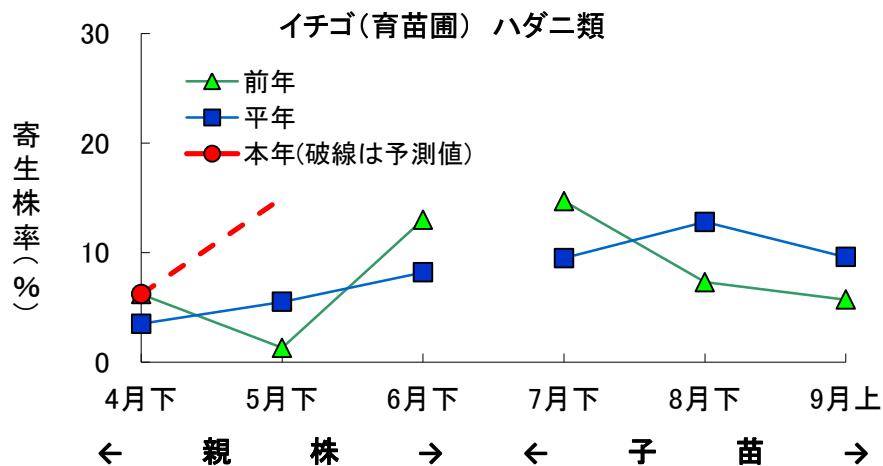
(1) 巡回調査では、寄生株率は6.2%（平年3.5%、前年6.2%）であり、平年よりやや多く前年並である。〈±〜+〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±〜+〉（気温やや高：±〜+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、古葉等を除去し、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

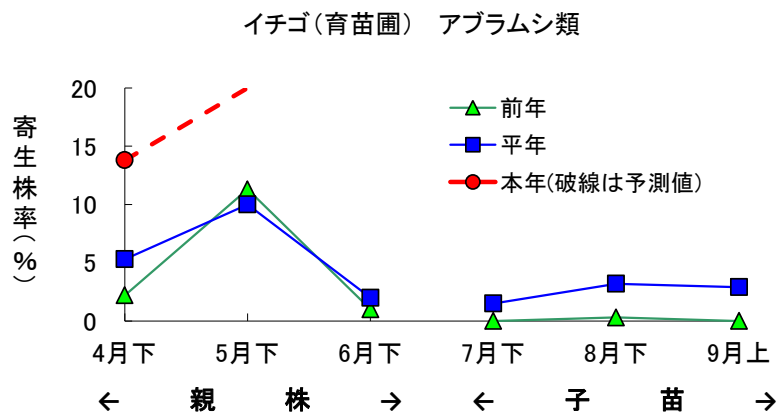
(1) 巡回調査では、寄生株率は13.8%（平年5.3%、前年2.2%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±〜+〉（気温やや高：±〜+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏に寄生していることが多いので、古葉等を除去し、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



ナス（促成）

（巡回調査：4月21～22日）



巡回調査時の生育状況

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は8.1%（平年7.7%、前年3.8%）であり、平年並であり前年よりやや多い。〈±〉

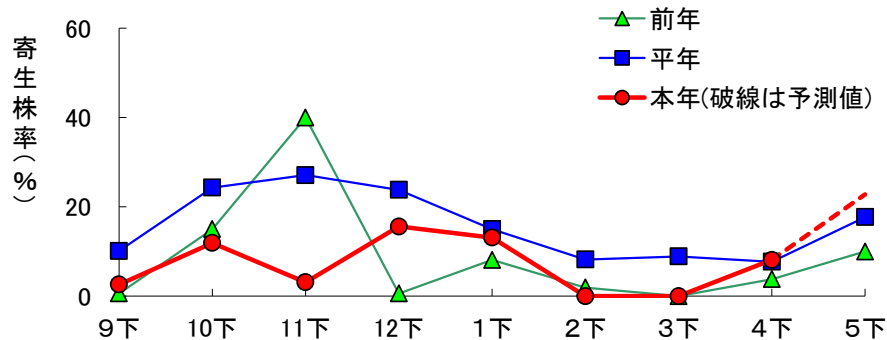
(2)気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1)葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス アザミウマ類



2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は3.8%（平年14.5%、前年1.9%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉

(2)気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

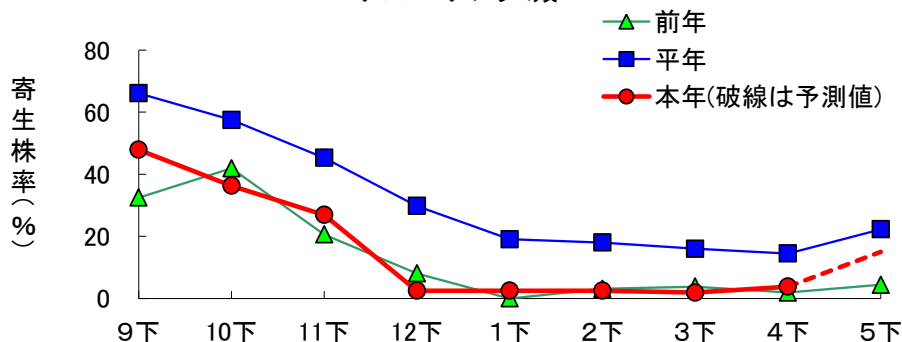
3) 防除上注意すべき事項

(1)施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。

(2)葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス コナジラミ類



キュウリ(半促成)

(巡回調査：4月20日～23日)



巡回調査時の生育状況

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は11.9%（平年7.9%、前年13.8%）であり、平年及び前年並である。〈±〉

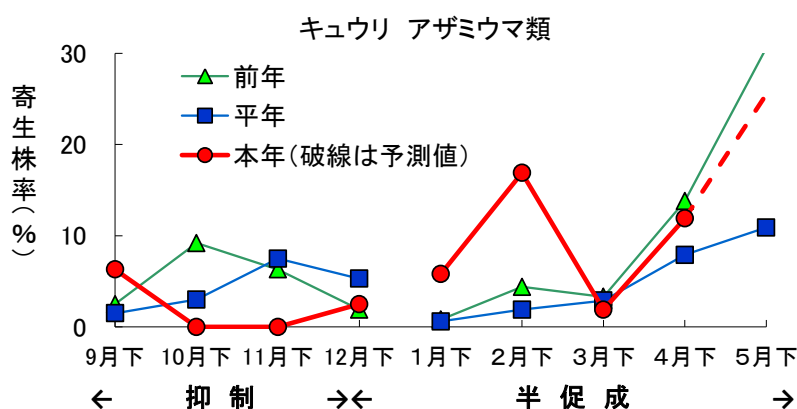
(2)気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1)ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3)栽培終了後はハウス密閉処理を行い、本虫の圃場外への飛散を防止する。



トマト

(巡回調査：4月20日～23日)



巡回調査時の生育状況

1. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、葉での発生株率は16.3%（平年10.7%、前年9.4%）であり、平年及び前年よりやや多い。〈±～+〉

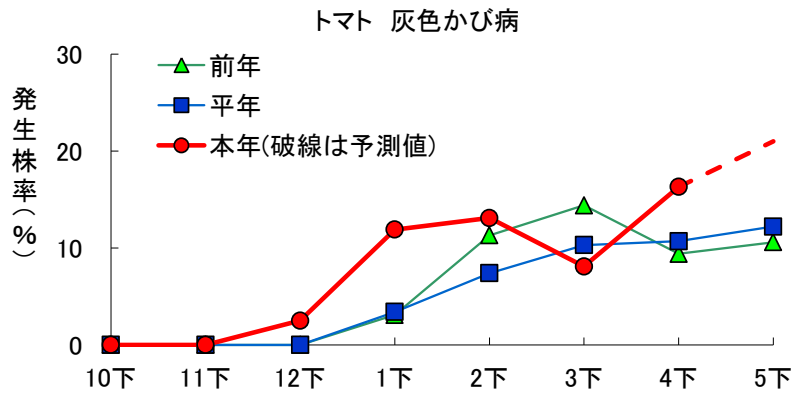
(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発病葉は除去し、発生初期からの防除を徹底する。

(2)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理する。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は2.5%（平年5.1%、前年9.4%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。（-～±）

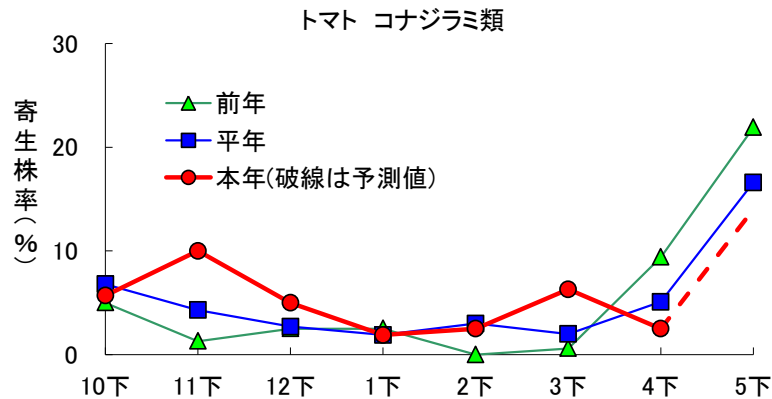
(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。（±～+）（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) コナジラミ類はトマト黄化葉巻病を媒介するため、防除を徹底するとともに、圃場外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後はハウス密閉処理を実施する。

(2) 幼虫の寄生が多い葉は除去処分し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



アスパラガス

（巡回調査：4月20日～22日）



巡回調査時の生育状況

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

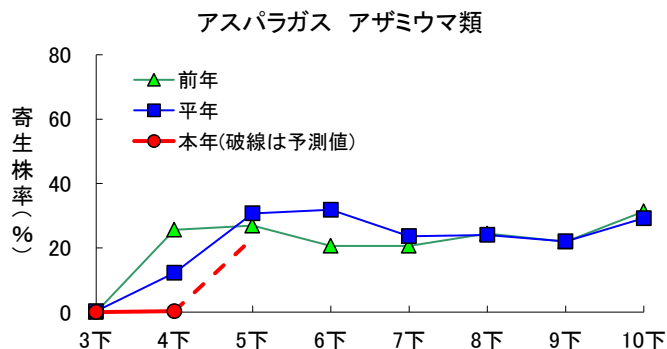
(1) 巡回調査では、寄生株率は1.3%（平年12.2%、前年25.6%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。（-～±）

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。（±～+）（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難であるため、低密度時からの防除を徹底する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



タマネギ (本圃)

(巡回調査日：4月22日)



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、露地圃場の発生株率が19.0%（平年9.1%、前年23.3%）であり、平年よりやや多く前年並である。〈±～+〉

(2)発生状況は圃場ごとに異なっているが、多発生圃場が一部で見られる（表1）。〈±～+〉

(3)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発生したべと病が周辺圃場の伝染源になる場合があるので、防除対策は地域全体で取り組む。

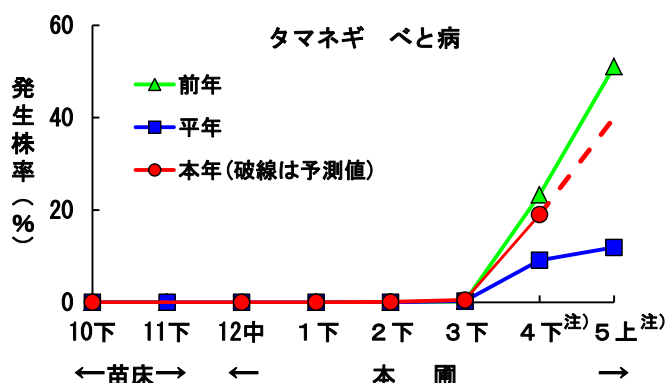
(2)発病株は貯蔵中の腐敗の原因となるため、立毛中の防除を徹底する。

(3)薬液が葉に確実に付着するように、十分量を丁寧に散布する。

(4)詳細な防除対策は、[平成27年4月2日付病害虫発生予察注意報第1号](#)を参照する。

表1 タマネギ巡回調査圃場におけるべと病発生程度別圃場数（4月22日調査）

発生株率 (%)	0～20	20～40	40～60	60～80	80～100	計
圃場数	9	1	0	2	0	12



注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

2. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

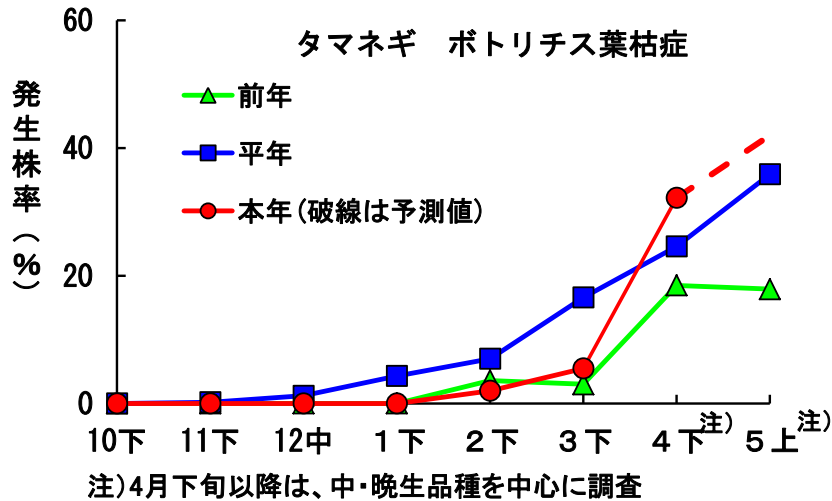
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、露地圃場の発生株率は32.2%（平年24.6%、前年18.5%）であり、平年及び前年並である。〈±〉

(2) 気象予報では、並発生条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

本病は貯蔵中の腐敗の原因となるため、立毛中の防除を徹底する。



3. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

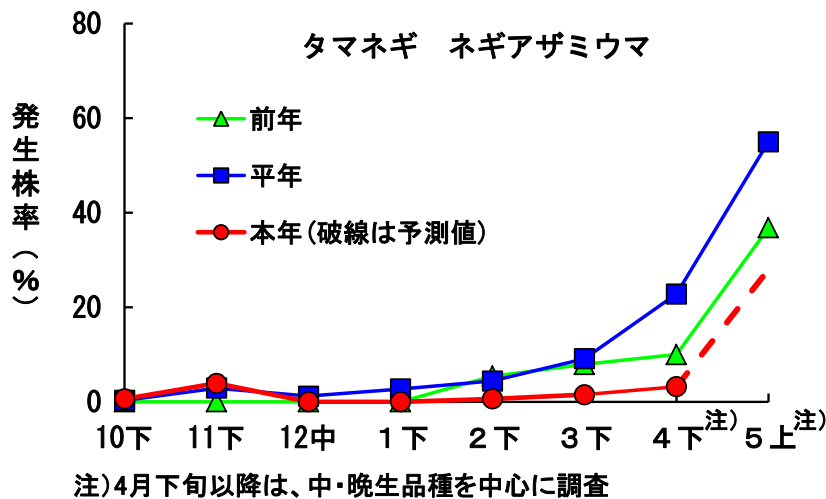
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、露地圃場の寄生株率は3.2%（平年22.8%、前年10.0%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉

(2) 気象予報ではやや多発生条件となっている。〈±~+〉（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

本虫の食害痕は貯蔵中の腐敗を助長するため、立毛中の防除を徹底する。



5. 病害虫等診断依頼状況

平成27年3月21日～4月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

作物名		依頼件数	診断結果(件数)
普通作	オオムギ	1	斑葉病(1)
	計	1	
野菜	アスパラガス	5	疫病(1)、株腐病(1)、立枯病(1)、斑点病(1)、生理障害等(1)
	イチゴ	8	疫病(2)、アブラムシ類(1)、ネグサレセンチュウ類(1)、生理障害等(4)
	キャベツ	1	ネギアザミウマ(1)
	キュウリ	10	黄化えそ病(3)、退緑黄化病(1)、緑斑モザイク病(1)、ネグサレセンチュウ類(1)、生理障害等(4)
	小ネギ	3	フザリウム属菌による萎凋症(3)
	ソラマメ	1	生理障害等(1)
	タカナ	1	生理障害等(1)
	タマネギ	5	腐敗病(2)、べと病(1)、べと病とボトリチス葉枯症の混発(1)、生理障害等(1)
	チンゲンサイ	1	生理障害等(1)
	トマト	2	黄化えそ病(1)、褐色根腐病(1)
	レタス	1	菌核病(1)
	レンコン	1	レンコンネモグリセンチュウ(1)
	計	39	
花き	サルビア	1	灰色かび病(1)
	シンテツポウユリ	1	フザリウム属菌による苗立枯れ(1)
	トルコギキョウ	4	株腐病(1)、茎腐病(1)、生理障害等(2)
	バラ	1	根頭がんしゅ病(1)
	ヒマワリ	1	生理障害等(1)
	ホオズキ	2	生理障害等(2)
	計	10	

合計： 19 作物
50 件

内訳	糸状菌による病害	: 18件
	細菌による病害	: 3件
	ウイルス・ウイロイドによる病害	: 6件
	害虫類	: 2件
	線虫類	: 3件
	生理障害等	: 18件
	合計	50件

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に3月24日～4月23日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
香川県	注意報	2015/03/25	レタス	べと病
茨城県	注意報	2015/03/25	水稲	縞葉枯病
長崎県	注意報	2015/03/30	たまねぎ	べと病
埼玉県	注意報	2015/03/30	水稲	縞葉枯病
佐賀県	注意報	2015/04/02	たまねぎ	べと病
島根県	注意報	2015/04/02	たまねぎ	べと病
兵庫県	注意報	2015/04/13	たまねぎ	細菌性病害（腐敗病）
愛媛県	注意報	2015/04/13	麦類	赤かび病
群馬県	注意報	2015/04/13	水稲	縞葉枯病
山口県	注意報	2015/04/14	たまねぎ	べと病
兵庫県	注意報	2015/04/15	キャベツ	菌核病
岐阜県	注意報	2015/04/16	施設野菜	灰色かび病

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）				
発信元	日付	作物	内容	
熊本県	2015/03/23	トマト	トマト茎えそ病（CSNV）	
東京都	2015/03/26	キウイフルーツ	キウイフルーツかいよう病（Psa3系統）	
新潟県	2015/03/26	かき	カキサビダニ	

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）				
発信元	日付	作物	内容	
福岡県	2015/03/24	ナシ	赤星病の適期防除について	
佐賀県	2015/03/26	麦類	赤かび病の適期防除について	
長崎県	2015/03/27	麦類	赤かび病の防除対策について	
福岡県	2015/03/30	水稲	イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率について	
熊本県	2015/03/31	い草	イグサシムシガの越冬調査結果について	
大分県	2015/04/01	施設野菜類	灰色かび病対策について	
大分県	2015/04/02	麦類	赤かび病の防除対策について	
福岡県	2015/04/02	麦類	赤かび病の防除対策について	
鹿児島県	2015/04/02	果樹全般	果樹カメムシ類の越冬調査結果について	
長崎県	2015/04/06	ばれいしょ	疫病の防除対策について	
福岡県	2015/04/08	キウイフルーツ	かいよう病の防除の徹底について	
佐賀県	2015/04/13	キウイフルーツ	かいよう病の防除の徹底について	
長崎県	2015/04/15	水稲	イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率について	
福岡県	2015/04/20	麦類	赤かび病の防除対策について（第Ⅱ報）	
福岡県	2015/04/21	キウイフルーツ	かいよう病の防除の徹底について（第Ⅱ報）	
鹿児島県	2015/04/22	サトウキビ	カンシャコバナナガカメムシの防除適期について	

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

◎水稲育苗箱に農薬を施用する場合は、**農薬が育苗箱からこぼれ落ちないように、畦畔等で行うか、育苗箱の下に不浸透性のビニルを敷く等の対策**をとり、散布しましょう。

◎農薬の登録内容は変更されることがあります。

使い慣れた農薬でも、ラベル等で登録内容を確認して使いましょう。

**農薬の使用にあたっては、
以下のルールを必ず
守りましょう！**



記帳も
しましょう！

**農薬は、登録農薬を適切に
使用しましょう！**

登録農薬にはラベルに「農林水産省登録第〇〇号」と書いてありますので、使用する前に必ず確認し、ラベルに書いてある農薬の使用基準を必ず守りましょう。

農林水産省登録
第〇〇〇〇〇号

ラベルの内容

- 作物名(使用できる作物の種類はどれか)
- 使用濃度、希釈倍率または使用量
- 使用時期(いつ、又はいつまで使用できるのか)
- 総使用回数(何回まで使用できるのか)等



(佐賀県植物防疫協会パンフレットより)